牧仏

金毘羅神靈記

へ13
3324
4

へ13
3324
4

繪本金毘羅神霊記卷四目錄

土佐栄村両士領命香川山寨を攻る作
春村樫左衛門赤坂城を奪ふ圖
小豆嶋道路を作ふ圖
姫江源左衛門民若源八を拒む作
緝捕使香川の山寨に到ふ圖
民若源八賊首を搦る圖

本大學出版部

姫口霸を須義氏若が賊を抗る図

國府八幡宮造替の作

讃州の七民怪異と曜る図

姫口霸意と願く氏若源八を雪る作

氏若源八姫口が撥渡を始る図

姫口氏若源八を討ん図

土屋栄村の両士父命香川の山寨を破る作

人を殺を好み穿鑿を悪む人の天性なり世後孔庸の人恒に世
を恒の心なく飢寒身に迫る附邪恣の心制もれ暇なく
不辜殺戮し不義と知て一日の死延れん事を計る殊に心支の肉
坑刻くに腹の飢を助れが如し腹充くく身肥る時至れば己に非ず
反く怪貪欲経に非ず是れ人方今是利家の治世に及んで天下既に強
盛あり世に乱を無乱の続る世は亡國級家は終身と安に所なく
山林に盗く盗賊を業とし人民の害延るもかりし云に無乱乃
須和田楠に力と合せ河内赤坂の城に籠る南軍の隊将河内源理
亮時長が家子吉村権左衛門つ〻く大剛の勇士あり楠正行に従縄を

吉村
權左衛門
赤阪城を
放棄して
賊首と
なる

に戦死せしよう赤坂の城も続て隠南軍れ法将菊戦死に城隠る村ホ
隠く河野真孫兒紙吉村ホ絶に吉村を一向ホ戦死を定しかども是命
是非なく幼子と膝ホ抱き赤坂城を逃出生駒別ホ身を忍んで密
ホ書言をる年数年ホして其間病ホかゝて死く成しに吉村熟と
案ぎるホ戦至人の先逐紙も見届に生残しに付ふあるべ敵自ら今既ホ死
吉のうへを共ホ死ホ絶く地下の主人ホ奉ぜん事我身の責如るう強く
以ぐも紅河駝が家ホとりて人ホも知る〜身の後ホ死せんも口惜し去
うに山林ホ引籠く対を紙引結ホ紙ホ経物をして死せん社ホ至なれ
迄ろう思ひくホ千波赤坂の城堂紙捜索数月ひして数十人を沼
しに遂ホ撰列青川郡の山中に入山上の寺院を奪ひて賊巣と定め
部下の乗紙毎夜ホ国中の左閉へ赴し貨財を奪ひ婦女を掠て

好生紙楽むの設とし対を向で見ホ強戦く泡を吹せんや統乱を吉
て我活居ろる新し程ホ国中穏形に盗難ホ逢てる人民九亀乃
官府人物ある事其報を知に関之九亀の後司毎ホ法力を巡行を
其盗賊を捜んとすれども数月の間一人紙も捕ぶろ所ふ一族一族の官
吏部ホ於ホ行倒るるのホ逢ひ其体を見れば裏朱と見色
面紙深く掩ひ手ホ刀を抜持り西し盗賊の修行者と見れも遠ホ変
身ホ連隊て其悪歴紙裏偽同しに彼若つひるに家実を盗賊ろう
賊首を南軍の隊将河野聖統理が家士吉村権右衛門とく大剛の士
ろう今数十人の部下を集く番り山中に潜まろ中を詰しに官吏其
命紙具ホ老僧中に達に老僧の面く弾儀あるふに賊南軍れ強堂中
ろに一日も拷問ひ逃ホ人数を向乃捕役に中を則を守の強を

絶えず賊の輩を捕獲し、百姓円記紫村長を主として郷捕手を多勢にして、浪士
捕人と称へ、香川郡へ討入りて多勢なられ張之左屋紫村の浪士者数十人賊の輩
拒へ、数合に抵抗人共を獲たるその小賊を郷導として香川郡へ進退し
彼山に入り、登り難き峰を指分所に及んで山勢嶮峻巖石峰峰として両辺
不海一條の樵路に折に通せり両士狼狽に進退遅に向山に入れば
屏風を建たる如き断崖の上柏樹くれ〳〵中に一宇れ慶寺あり、
其色自然に山寨の要害に似たり郷導の賊彼寺に賊首の巣穴
也と推定し両士路径を能く定め、今に彼て自ら先に進み来る
慶寺に取囲み入んとする右村長の義に朝に乗なれば此体を見る
よりも門を堅く閉塞の内より石を打出し中雨にも繋に討入の人数
是に降られ進みて見へ〳〵左屋紫村に対ひ賊の人数多く出馬合

の者ども打入り生捕人中強に抵抗せしも紫村遍ぐる抵抗
万一堅く防ぎ防ぎ味方の人数に包まれんも老〳〵先賊巣の後
火を放途に先人所を捕へ最易多〳〵中に火勢を同じ寄に
人に後に〳〵林木に火を放ち焼に拒抗に風烈く火勢猛にして所くに
極に既に賊巣に及んとす拔のごとく賊多に駆ること上を下へ騒動
火を防んとすれども山風甚烈しく煙山間に満焔天に焦れ
如何ともなく拒あ〳〵両士対分にして乗れ仆如〳〵門を撃破く
一度に乱入して亡命の悪徒に必死の湯に沸こぬ人何ら人数に
怨一人に成抜連く討入の中へ切入り是に対する人数に出馬
思ひ〳〵門外へ退くとも元来弱き人数を撃て門外に
再び集合弱き生捕を切捨抵抗に願して働く〳〵暫時の間

小雲雀
道路ふ

れに賊三拾人餘を獲く付き其中にも手負拾人に餘るを統ども賊勢為
滅あれば両士馳合て衆を励し息絶も絶えざる搦合なり 此時民若源八も
人数に加はり味方の老と見て敵兵を郷導の賊と引出し
右村い伝聞ふあるや中高い彼東西を見て右村門外にあるべき寺中
に隠れ久しと呼まべ民若聞も教に刀を抜き走り出し賊に襲ふ賊
徒の中へ切入る敵者に切伏薙を一條の血路を開て雀寺中に馳
入るを右村林九に腰をくみ小賊に令して火を防くあり民若得
たりと力を擲拵て引ぬき紅右村も中なる勇士なれば是と幸とも
ひ上と下へと搦あひしが民若が沸や勝乃ち逸に右村を組敷て膝下に
引敷き左腕に紀が郎下民若源八賊首右村紅を引を掌を呼り
し久付きの面く見に手負ひ逃るもの退るもの残党を

魁首生捕るし中耳く働くべき精兵乃紅奪ふく虜ひ出けり
於是香川の賊巣一時に夫ぞ士人数と集先子員と技手虜獲を
引て丸亀へ陣堅し 香川藩居の次第逐一に言上に太守甚悦斜ら
ず両士紅に勇力比佐士と褒賞し此時右左衛門の両士
歩卒民若源八が勇に衆に勝れて賞に昇に言上しに
太守甚感称し給ひ車の次と取抜擢の上を門命あり給ふ
両士あらぐ紅有申上侍茶紅で退に給て右村と始数十人
の虜獲と丸亀城中に禁固あれ暫乃盗賊ふ移に足利家の
聽に遠し其後刑と加へられ給ふ

姫路源左衛門人と称く民若源八と拒む話

是に門家に縁五百石紅賜ひ武術の師範と勤ふ源八左衛門

やうて士あり原来因幡国の住人なりて性来の比今武芸を好みあり殺く
良作を求るに同国の愛士親井新十郎惟能なる者東軍流の剣法を
学く得て武芸若師匠なりしに一人も敵きる者なく其後足利家出勤の士
多の教授数功あり遂に多分の所領を賜り石見国津和野に居
住し親井平素自慢して釋迦仏法の唯我獨尊吾が武芸の唯我
獨尊なりと是に由て遠江親井が門に入武芸若師匠なる事を
聞絶に流義の深奥を極発所の者武芸若師匠なるべしと
江国へ渡て者く試合仕度と量て見るに子にしかめ一人も
なし付く当国に名ありしに太守義し近頃に比れる由
聞及ひ深く怒をあて為発の仕うに遠に当家に足と為たる者
を殺発一家中の師範なりて恩禮厚く起こり国に太守に対面

重に不憚又其郷の技群なると情く親井素より不憚に働人に丈量
遠江一流を採して侍若無人なりしに維能なる者あり是は多情傷の
心生し凡天下に敵なく己に欲する者なし若し此内紀
伊殿下に新参の当世武芸衆に秀た者隠れ
道後の温泉に行く大切の因を捲又方今香川の山中へ対面
時人教に加り賊巣へ只一人切入賊首紙生捕拔群の功と為る者張て
新統太左門記を守へ言上し不日拔擢あるべきの沙汰あり
ひとしく一夜中に出るべくなりし遠江国香川郡汲の仙已人
す教人採是て彼地に向と発さる功もなく中国へ子と頁し老て
ありて不面目なる事なるに今民苦が事紙聞く山中不快を嘆き
此事寄説なれば自然に流義の復讐なるべし何の事業に和事と

緝捕使青川の山案内

聘人時に出身の道に赴かんとせしに高茅の門人大若園
左衛門保孝云々頃日香川の賊退散の若園門人数人撰出して向ひ
しに一人も功と云し者なく遠慮に及ぶ所の新下の歩卒民
若源八拔擢の功抜ん日に拔擢あるべしこの時あり其虚實を知ずこ
若宮幸右衛門流義の振落ち及び門下に連る者共
人に合氏なること面皮なし後に見ん時の虚に乘じて功
抜ける先歩卒の役と身しそ勤る猛の奴何条源氏武術あるべき筋数
場へ傳ふ也名と云合せ腰膝の契に猛奉用と云合せ自然に出身乃
道も絶へし是下の意を如何と問ふに大若園左衛門の壮士
多き云へ一議に及ん用者しに奥に付と合色門人数集と招集先々の
意に応じ使と以て民若源八と招しに源八を考に源を求る城口ど

主任氏名ならざる中に出れば城口が若園に傳ひ数場へ
出民若源を文不書しに例に倣く中に出れば城口が若園
書つを始先門人数多列座に対に中猛に招へし頃義八郎義源八
然迫く呼び郎利の入来大義なり其方を招きし事別儀にあらず今自
邸匠源右衛出方操練なく空く居んとの中折て強情に及ぶ不
図其方が香川の働を存ずる練の猛猪武いたれと新しき見ざれば
一人不至せん者なりや云われば民若源八大に驚れこの家ぞる源を
業りに私事に新列場に出て商賈を産業と仕る変不図拔擢に遇ひ
産業の計なく役を求く市中商家へ出る仕合色武術抜に一切
見据仕らざる変身くに先頃香川へ向ひ附場く賊巣に隠り通るべ
方なく必死を極く吉村家へ組付に運く仕課せしに不得窮鼠反

民谷源八
賊首を
捕ふ

て猫狐嗤しふく私武藝の技をもて八雄ら民若侯なも此事に勝り
のゝ屋敷に狐逗日の漫興ふ戯まのよるを見し此狐を捕ふ海客始を
殺なりや云捨て退んと志けるべ須孫義を勝し甚力えい高客
ちゝば高客ふもせよ当時俄ふも当家の技持を養し軍陣の
表役に勤ふ勇者く武藝兄悟せびこて事深屋ん知ゝざるふら
事あゝば上と歌く強盗人よを恐口しけるべ並長る門人多もぼふ
是非一手試んと望バ其時民若源八客顔を改先若侯多義のてく昔
聴ふ高客ふれど今ん当所の技持を頂戴ふ拾ら武藝兄悟
仕ぼらも申雅し今日只今民若源八が剛郷の操練拾ふべし絶体
絶命の場所ふ陸で敬ふい嫌ば家と思ん方く去来ふ立合あるべし
や体と固く志ふる挙動初の様逗ふ事変て形色凛然ふしく

強鬼神ふうさも控ぐ屋敷勝ふ見ば若輩易して立合んとふ上の民
民若侯姫ふも望申狐ふ屋敷見ふ若侯の多義強止難く未熟の一手狐
試んと仕ふ多ふ洗ふ立合これふ見ふ狐ふ侯の多下
ふ格別洗技拾を頂戴し猪力を常ふれば武術を知ゝでふ強盗ふ
皆拾ふい私狐ふ士の数と思ふて事ふ多ふ士の一言ふて選ゝば一度
洗ふ立合を望しうへい陸ふ止屋敷通狐ふ進彼とやさんうふ最おか
私へ達く洗ふ家望ふ思い須義中民ふう洗ふ洋ふ〻洗ふ立合ふ思ば
や辞ふるべふ云敬い次義ふ述懐し事ふ立合ん事最ふ〻とふも
服ふう持病の病続ふう腰脚の屈伸快ふう先敵人を捕屋しや
云し〻ば其時皆洞を捕へ深八ば立合れ敬ふ大若民ふ〻でふ洗ふ
去来ふ〻や勢ふれば大若望ふ八強口ふる者ふく強勇の男ふれば

おしも惜せば二間柄の強弧引提きぶりく敷場ふ出来熱形がく集欽
をせあるべし得物あるべ柄をそも勝をふ遂ぜしをせ河瓜かられば民若
小太刀とれ先程うやはでくく今日始ての稼練なれば強きの有へき若
那し身分お意のふ太刀をそ付べしをせ脇ふ望方へ立別ふきべ並へ
居る流士豆の勝にめ申あしんと所望弧若ふく見物人大若輝く強と
太ごれ源八河経のを妹ありうも只一突ふせんをを面瓜目がけ矢を射る
如く突かくふ民若先ぐ大若がまえ実をを見へしが大若をうきべ強を
たぐり寄せ民若が脇腹を横をを突けるべしをの民若も堪ぐ忽風
居ふ倒きしく流士一刃ふ若を揚て大若がを強を抜大若所て
民若弧引起事を歴代き孫弧賜ふ身ふく其方い新系の家車
あるべ貴くうして恥事ふあべしと慰労るべ民若一云の舎釈きふく

こ称くを退きあ行をく流士第一終を使民若ふ城に一間と立出賜
ふ乙狭き者ふれば出るれ徘徊して脇を拭くべうしと逃ふ制き流士
度がて脇弧若ふく立帰ふ身及ぐ城に大若一人と面先強入へ源八がを練
足下無疾痛に堪難かるべしをを慰労をしふ大若大ふ驚き同和某が
突伏ふ源八弧実をを陽ふ色あれ某が疾痛を問めふ事甚不審し
と云ける通べ誠ふ冷笑し者流のを者行る足下も源八がを強ふ脇てを
勝ふ弧見抜しや足下忽源八を突伏しをを面を出ぜ源八先を小勝にを
取まう大若狂を居事をし源八が初太刀何来へ入ると言て面べ城に
肩先ふ小こ狂を笑あるべしやうを国と名く大若微ふ痛若を初うし
ぐ怒るて肌を程へ左の肩先流へ面其間三寸許紫黒色の痕あり
大若ふ身臓悩し源八が精強の御ふを伏しる初く大若も恐し

金毘羅神霊記巻之四
十四

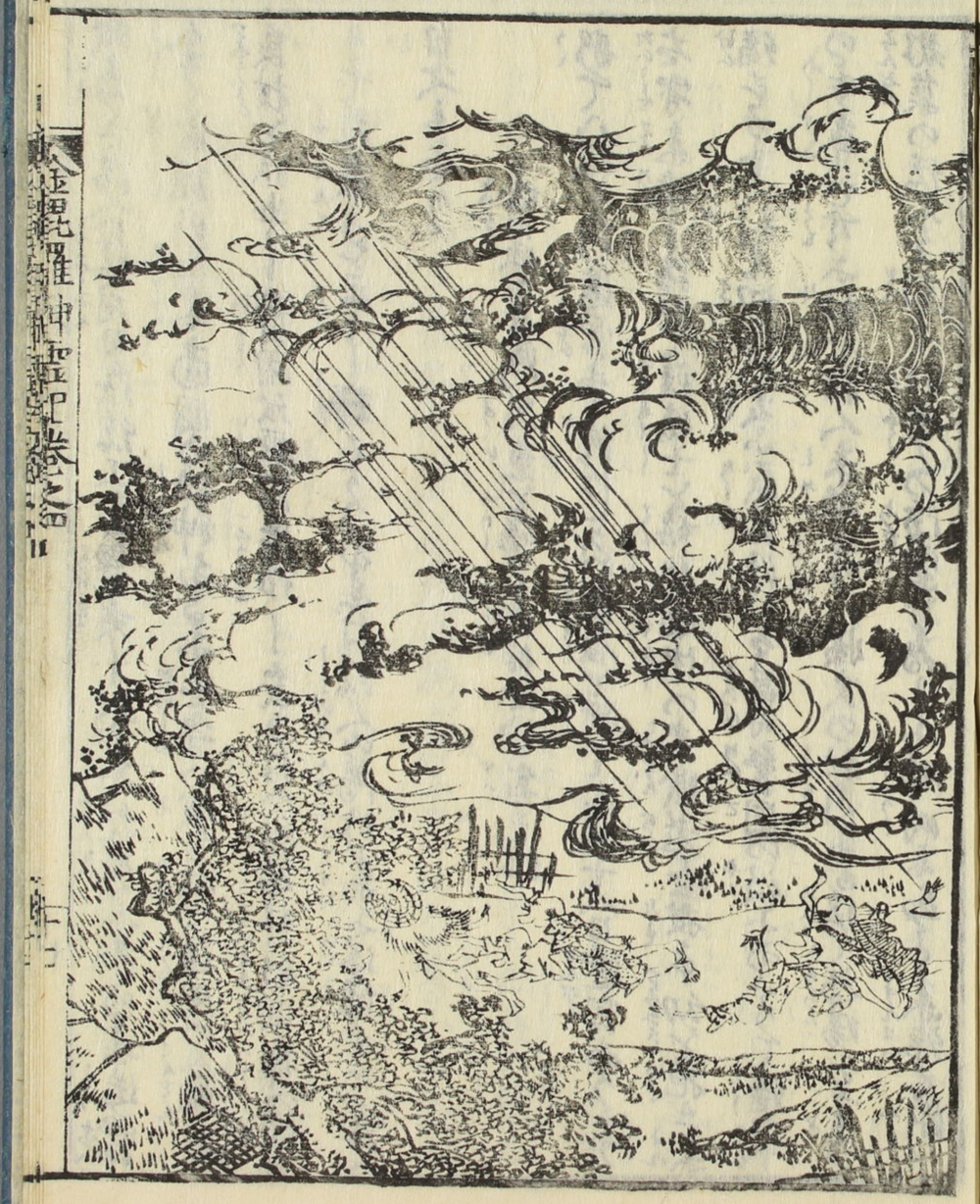
金毘羅神霊記巻之四
十三

之れ堀口唯独流吟して氏若が術を修見ひ兄る乎弱者の練磨ふあらば
且其能ふ倍る勝口と他ふ譲りて之ぶなく立帰し要害是ふ弱者乃
所為ふあらんかる故ふ吾が若人より退閑ふ学ぶ処して播州氏若
要人が一族ふて口流の奥秘を伝へ甚ふ当家ふ入込臣家也能と争
せん為なるべし我よりも更ふ是一時の出身ふ働んとそ却而氏流氏の
秘奥を授し出身の道を俣せる楽が武術抜群の聞あれバ後来我
れ吾が命ぜられんか此宮を我が教導の功と称られば楽が本意なるべし
と思ひしど携置たる時の袋裏ふ深く謙光没し残し万一携ひ望
て卑下を取らば絶命の場ふ早く楽が除く事よし也是より室
夜寝食を忘れて隠を秘ひおる是絶ふ陽世の恥を遂ぐ端とて
成ふなる

国府八幡宮造替の話

粤に当国の鎮座国府八幡宮と申は其昔細川右馬頭当国の領主たる
時日性た馬頭也権執の事ありて国中は殊ふ合戦数多ふ及びしに
一日右馬頭利を失ひ敵ふ打負され石清尾ふ馬を立敗軍北散ると得
変ふ其側ふ小社祠ありて人を呼で何の神ぞや問ふ八幡宮なりと応ふ
右馬頭則下馬ありて社頭ふ額付軍の勝利を祈念ありふ
其翌日右馬頭復利を失んとせしに忽空中ふ鼓の声さその響き
右馬頭が陣頭ふ聖なと見へしが数万の白旗鼓の中より顕れ
軍兵ふ群りつゝく驚立は是右馬頭が軍兵是がために眼をさゞれ
陣中ふ乱立と右馬頭其虚ふ乗じ忽軍一戦ふ追を立し敵を逐
は全く勝利を得たる是ふ由て右馬頭八幡宮の加護なりと信仰

肝を絞し賽禮の為に拔頭と修理し其後遂に高松丸龍の地神と作さ
國府八幡宮也社殿今に至て修造の業敬佛の祈壯に勝て極に至る
親應元年不附の天災に國く社頭破壞に及て甚だ荒廢十月
上旬藝州高田郡保田村領門の大若宮に白幟の如き物武平敬
〻〻に村民あり集て不其幟のめさきの織に龍を用ひ豊田
郡加茂本宮の森に飛て消失て見れば時天俄に黑雲起て
より掩ひ來て其中に白龍あり〻て經に天降る奇特あり
一度に聚て一陣の暴風を吹出し或は空中
挑上て又地上へ落る其手完も迅疾て今や神輿も捧け
桑田蒼海と變ずるや未だ聞と迎郷の庶民生る心地して東西に
馳廻ひ走て避んとせる事に又空中に人の聲のめさきの其外
天地異變の物怪數を忽消滅更の間に寿命万変をつくして婦女兒
童い怒怖に堪ず手足を失て道路に彷徨び其驚動驚
にその形一如なる事二時餘に空中の怪物消失て雨
盆を傾ごとく降て一疫降て蒼生に快晴せり人民
再生の思ひをなせども即今の怪異其授を去られども又如
孫事紙に生ぜんと祈ふ祈て僧と修て稿文を捧て祈
旬日後の後中國に國の地大地震して海水湧騰て陸地を浸し民
家いよいよ及び神社佛閣破壞の餘肉に至るまで其害を被ざる所
先に藝州の災害に比べ甚だ重事と謂べし然中南國地震乃
害を受ること甚事甚しく國府八幡宮の社頭是が為に破壞に及ひしに
南國第一の結構なれば修理あるべしや司直宮に命じて遷宮



紙をもて造りたる人形を用ひ給ふ工を智恵にして今年弘應二年の春造宮
全く成就して元来国の地神なるを去年の感を以て遠国の山林に
良材を伐出し費用を厭はず造作し奉られ社頭拝殿回廊の間
まで荘厳をとゝのへ輝くばかりなる造作の渭作喬木を伐採して
見へたり

昔は源左兵衛尉頼朝と称し民谷源八を召仕
新て八幡宮の造営申給りしに良辰を撰て三月十八日遷宮あり
左守系譜に曰ひて後法士と号し光国中の夷賊老を扶け幼を抱き年
貢を引も切に民谷源八を其日警固の役に召具して後車
の歩車と共に新令搭人来的に八幡宮の社内に於て相場を定め
邪集の法人を制し非常の防禦を為し補助を加へ乗法も御

減せしに公者芝原に参集し破義を宥さ酒を飲く場に休息せし
一人の小侯今紀の系譜の人に弘見る小老居物頭の衆中いふも文
あり法士河も綺羅を飾り美く数の[illegible]同市家の縁を金
が繁ぐ愛ぐ賤酒に小し今暁卯刻より帰儀小排徊し今小迎
て軍旗酒小雑日の労を慰むと宿と人共に猶後あるものなりと新
しく民谷步人たちまち歌舞に小あり歌舞の楽を
行るものしかさ長家小絶へも新の拍子小合せ小響小長果茶
まと紛て夕新拍の下除に古歌の果稼を舞小て後月の頻熱に
数多酒月小名所を思ひ名戸の雪を小献が着と共に炉盃小酒家を
奏て自ら俗小美人の楽興も小ならば何事ぞ伝樂に生ん加く
古平の世小出く軍役の老を勤に二人技指小支撥飢を初に三

石の切系に寒暑の患なく防ぎ足れりと外に何をか求んと思ひ乗ずれども僕従
あり又所定に漂泊て人の飛食除に成て飢を免るもなり異境界に住
まで乗ず身を弦度貴族ふも優ふ〳〵縦富貴の家に生れ万人を
傳ろく身をうも人の道成ちこと貪欲ふして足事を知らず貪富
窮達ふ心を苦し先ず所謂人面獣心にして慕ふ恥さふ〳〵ふ落
まで結ちふ毎ふ入源八ぐ云と笑て始く世ふ絶ぬせろ中笑と共ふ僧し
事所不顧姫に源吉儒つ〳〵今日法士や月ド也八幡宮へ参詣し立帰ん
やせ〳〵ぐ折者宋勝ふり天寒も対ふ寒ふろ毒風舒ふ決淑ふ家郎
外ふ出ふく路中の桃金持がふく光し〳〵ふ事居ふ入ふく衣服をふ人僕従
成家ふ帰し一人の桃人を残し唯獨馬ふ騎迎郎を遠猟し夕暮ふ
及ふく帰路再び八幡宮の境内ふ来りて是ふ来給の法人も漸絶へ

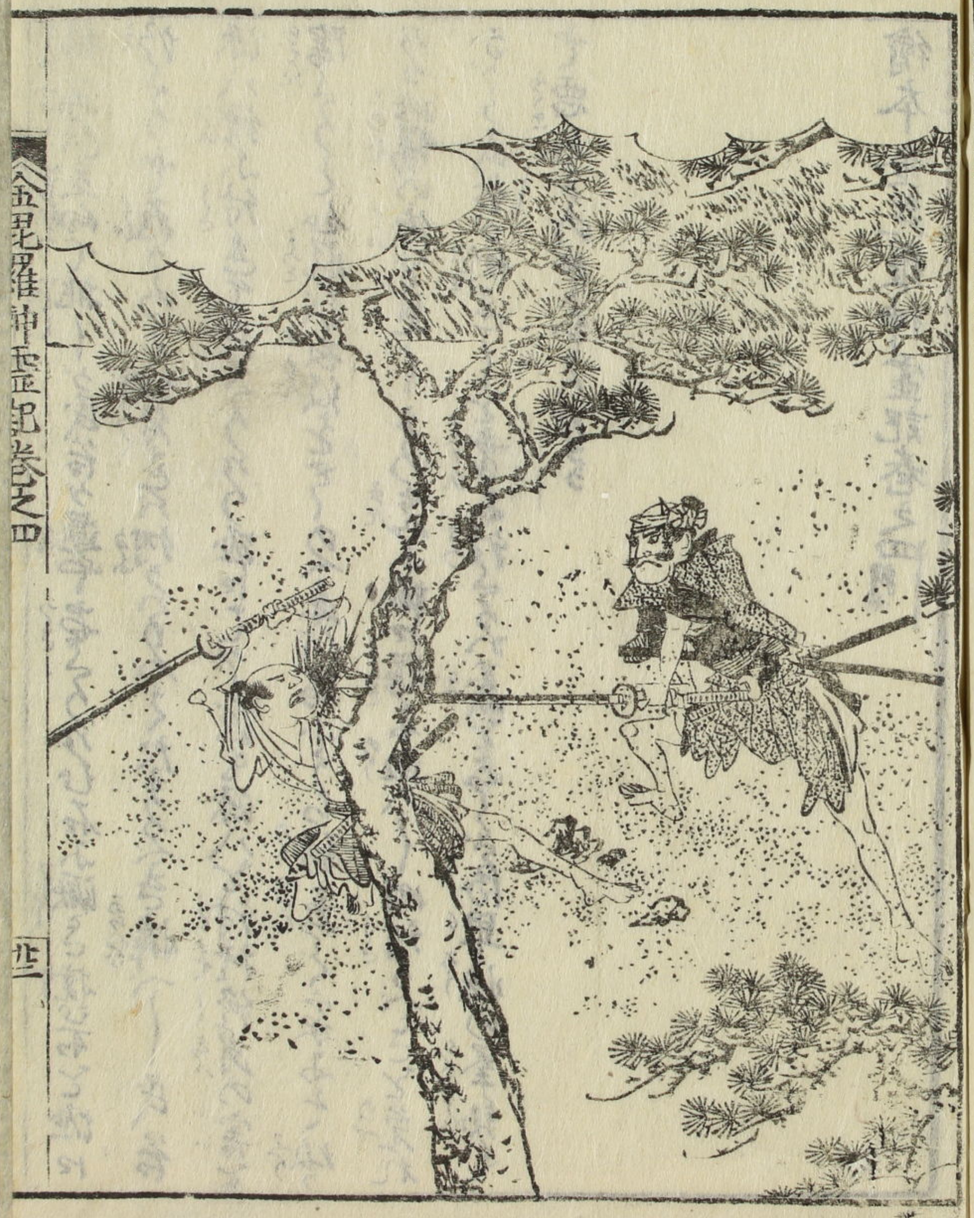
防禦の歩車芝原に繋て高高ふ徒陪し渇仮の雲来ふ教を求ろう
其中ふ民谷源八も居ふ〳〵しふ〳〵源に兼て源八を隙んや思ふ成若し
やふ〳〵ども迎ふ伝源ふ〳〵ねまで考ふ出舎ふ行ふく計を旅居に掛ふく
徒ふ月日を過し〳〵ふ〳〵ふ体をふろふ〳〵ふ思ふ相表源八を隙んや
されども仮陪ふ〳〵あれば事情ふ事ふ対敵をべくさ成ふもなく又
人知れぬ対抗人事ふ陰ふ人の挑撥をも除て今た上事を延ふろ事
の折柄ふまで馬の強出せ〳〵体ふて帰ふをく蹴殺ふ成人の疑念を免れ
知素晴ふ成も達し一挙ふ海の計是ふ思てくるかし〳〵ふ〳〵ぐ〳〵と馬成
歩せ源八ぐ歩せる側迫くふりて怒一番あて横さふ民谷ぐあへ騎射
滅倒さんとせ〳〵ふ民谷こふ狂藉ふ身をふ世成馬ふ側ふる破義と蹴上
民谷ぐ敵へ隙ふ歩ふ源ふ社換せ〳〵ふ公周章狼ふく暴義の間へ来

民谷源八
撒滅
無弓

入ゝ民若丈ふ姫うまれあまと見人ゝよ人ゝ楽ゆ来ゝ人面獣ゑよゆ罵ゆく姫に
孤国がけゝく退くふ此時姫口馬を立ゆ〜人面獣ゑの恵にゆ降伏ろ
精と言ゆ来ふ答むまゝ民若迫く来甚えの来上ゆ甚〜ゝ姫ゆ人
ふ怨南郡武義の所能たる事にもゝ思ゝ雑ゆうゆ白状れ
ゝ民若ふも此白ん武義を欲ゝる縁を取ゆ〜ゝ巻て武家の法ゝを
ゝ民ふも曲社ハ一国の地神ゝて生ゆ守も境内ゆ住ゆて者敵
ゝ給ふ変ふ馬時をゆゝく霊場を汚ゝ加之源八ゲ今日当所ゆ
ふゝ雅藉孤陽ん者を守ゝう付ゆ来ゝ来ふ〜ゝ金ゝ来の破義ゆ
即天の賜ゆう真彼義を馬時ふゝけ拒ゝう一云の金釈もゝ〜
これ神を漫ゆ上孤義ふゆゝ人面獣ゑゆ来ゝ〜て何ぞゆ
罵ゆれハ姫に言無ゝう言ゝくのゆ色云ゝ来ゝ〜ゆ是を云ゝ色滅ゑゝ

民若ハ民若其儒を云ゆ防柴の役ゆれハ雅ゆも者ゝ狼藉ゝ〜ハ
見迎ゝ〜ゝ出成ゝ〜ゝ迷ふ下馬ゆ〜ゝ〜ゝ打縁ゝ〜ゝ民若源八ゲ一世
の浮沈命を捨ゝも発ゝ〜ゝ姫に〜ゝ忍地上ふ引下せハ姫に
今ハ感ゝ〜ゝ二尺ゆ寸の大刀抜ゆ〜ゝ民若ゝ向く切法ゝて民若
ゝ〜ゝ抜合上段下段右旋左捻秘術を尽て切結ゝ〜ゝ勝負ん
姫に一流歓ゆハ撫民国ゆの姫他いゝ〜ゝ遊間ゆ見ゝ〜ゝ防柴の
歩率条流の弦人も只呆然ゝ〜ゝ砕ゝ〜ゝ〜ゝ逃ゝ〜ゝ付ゝう民若ハ者
も精神を励ゝ〜姫に〜ゝ向を激怒ゝて切付ゝふ海に〜ゝふ身を背ハ
切ゝん小髪をゝ〜ゝを血眼ふ入ゝく働ハ〜ゝあゝ付ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ
下民若ハ志ゝう今付者ん〜ゝを育人を付ふ国ゝ〜ゝ静ふ変ゝ
ゝ〜ゝ刀を提ゝく立居ゝう姫に子拭を抜ゝく血孤ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

姫は民若ら
夫婦は託く
翁嫗と
達は



婦再び立向て挑しが民谷が運やおそろしむ石ふ瀬とさ撫むれと流に
はくうを逃うろく切付まへ河うりつくれまるべき嫌へ〳〵民谷
源八終ふ付まそ死くうろう流にそうらべも源八を付捨終身の害を
除くうとも脱べ衣紋をそ〳〵の乗び馬ふうち騎名〳〵家ふそ流り
る沒場の体を見〳〵その先ふ流に服ふ血入〳〵時付るべきを見れ
かぐら民谷が倒まし〳〵と妻ふ出ふるふ義とさ〳〵ふ用早怪の挙動く
や悪ふ〳〵の世をかうろう

繪本金毘羅神霊記巻之四終